落合 いずみ（2022）『言語記述論集』14：115-130

セデック語トゥルク方言の次末音節における曖昧母音の後続母音への同化 *

落合 いずみ

帯広畜産大学

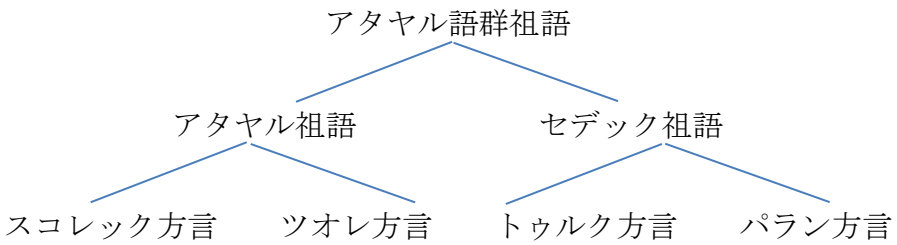
キーワード：セデック語、アタヤル語、曖昧母音、同化、再建

1　はじめに

本稿はオーストロネシア語族アタヤル語群に属するセデック語における曖昧母音の変化を扱う。アタヤル語群に属するのは、セデック語とアタヤル語の 2 言語である。両言語ともに台湾で話される言語である。小川・浅井（1935：599）によるとセデック語にはセデック語パラン方言とセデック語トゥルク方言の 2 つの方言がある。本稿は両方言の形式を比較し、曖昧母音にかかわる変化について議論する。本稿で曖昧母音と呼ぶのは *ə* のことである。

結論としては、セデック語トゥルク方言において、次末音節の歴史的曖昧母音―本稿では共時的には曖昧母音として現れないが曖昧母音に遡る母音の意味で用いている―がその直接に後続する母音に同化することを、セデック語パラン方言の同源語との比較のもとに示す。本稿の主眼はセデック語であるが、アタヤル語における同源語との比較にも言及する。ちなみにアタヤル語はスコレック方言とツオレ方言に大別される [1]。これらアタヤル語群の言語間、方言間の関係を図 1 に示した。アタヤル語スコレック方言とアタヤル語ツオレ方言から再建されるのがアタヤル祖語である。セデック語トゥルク方言とセデック語パラン方言から再建されるのがセデック祖語である。アタヤル祖語とセデック祖語から再建されるのがアタヤル語群祖語である。

図 1：アタヤル語群の系統樹



* 本稿は 2021 年 7 月 24 日に オンラインで開催された Phonological Association in Kansai の研究会における研究発表を基にしている。本発表においてコメントをいただいた方々に感謝する。また、本稿を読み合わせしていただいた野島本泰氏、セリック・ケナン氏にも感謝する。本稿における不備はすべて筆者の責任である。

[1] アタヤル語の方言区分は小川・浅井（1935：21）を参照した。

アタヤル語群祖語における母音体系を Li（1981）が再建している。それによるとアタヤル祖語の母音には単母音として*a *i *u *ə の 4 つ、二重母音として*ay *aw *uy の 3 つが再建されるとする。アタヤル語群祖語からアタヤル祖語とセデック祖語が分岐するが、これら分岐した後のアタヤル祖語またはセデック祖語の母音体系については言及されていない。というのも Li（1981）はアタヤル語諸方言とセデック語諸方言からアタヤル語群祖語を直接導いたためで、アタヤル語諸方言からアタヤル祖語を再建する過程、セデック語諸方言からセデック祖語を再建する過程、そしてアタヤル祖語とセデック祖語からアタヤル語群祖語を再建する過程を省いている。しかしながら Li（1981）が再建したアタヤル語群祖語の母音体系は、アタヤル祖語とセデック祖語の母音体系の骨格を成しているため、ほぼそのままアタヤル祖語とセデック祖語に適応できると言える。

また、Wolff（2010：111）が述べるように、アタヤル祖語（アタヤル語とセデック語）はアクセントの置かれる次末音節よりも前の音節において母音が弱化するという音韻的変化を持つことに特徴がある。このようにアクセントの置かれる次末音節より前の音節において弱化した母音を本稿では弱化母音と呼ぶことにする。多くの場合弱化母音は曖昧母音で現れる。アタヤル語群において前次末音節やそれより前の音節は弱化母音に変わるため、本来の母音は次末音節と語末音節に保たれる。

上記の母音体系には以下の補足が必要である。まずセデック語において二重母音 *uy* は次末音節には現れず、語末音節にのみ現れる（落合 2016a：19、月田 2009：60）。さらに、落合（2016b）はセデック祖語において語末音節に現れる二重母音として*əy も再建しているが、この二重母音は現代のセデック語方言において *uy* に変わっている。これについて、Li（1981：270）においてオーストロネシア祖語における語末音節の*ə がアタヤル語諸方言、セデック語諸方言において *u* に変わったと述べている。つまり、アタヤル語群祖語において語末音節の*ə は*u に変わったと言える。

母音について以上をまとめると、表 1 に示したようにセデック祖語に再建される母音体系は単母音が/a i u ə/の 4 つ、二重母音が/ay aw uy əy/の 4 つとなる [2]。さらに二重母音のうち/uy/と/əy/の 2 つは次末音節には現れず語末音節のみに現れる。

現代のセデック語方言の母音について言及すると、パラン方言の音素は母音/a e i o u/、二重母音/uy/（語末音節のみに現れる）。落合（2015）によると母音/o/と/e/はそれぞれ二重母音/aw/と/ay/に遡る。月田（2009: 56–62）によると、トゥルク方言は母音/a i u ə/、二重母音/aw ay uy/を持つ（*uy* は語末音節のみに現れる）[3]。

[2] 脚注 3 のセデック語の音素目録において *y* と *w* は子音としている。そして、これら二重母音は後半の要素として便宜上 *y* と *w* の表記を用いているが、これら二重母音は前半の母音に子音の *y* または *w* が後続しているとは見なさず、全体として二重母音であると見なしている。

[3] セデック語パラン方言の子音は/p b t d ʦ k g q s x h m n ŋ l r w j/である。セデック語トゥルク方言の子音は、月田（2009）を参照するとセデック語パラン方言とほぼ同じだが/ʦ/がない。本稿において表記上、/j/は *y* を用い、/ʦ/は *c* を用いる。

表 2：セデック祖語、セデック語トゥルク方言、セデック語パラン方言の母音体系

	単母音	二重母音
セデック祖語	*a *i *u *ə	*ay *aw（次末音節と語末音節） *uy *əy（語末音節のみ）
セデック語トゥルク方言	*a i u ə*	*ay aw*（次末音節と語末音節） *uy*（語末音節のみ）
セデック語パラン方言	*a e i u o*	*uy*（語末音節のみ）

本稿が採り上げる音韻変化は、曖昧母音の同化である。この同化が起きるのは、トゥルク方言において、次末音節の母音が曖昧母音であり直後に語末音節の母音が後続する場合である。言い換えれば語末音節にオンセットが無い場合である。形式としては C*ə*VC を持つ。この形式には語頭子音と語末子音に挟まれた母音連続が見られる。この母音連続は曖昧母音とその直後の母音から成るが、前半の曖昧母音が後半の母音に同化する音韻変化が起きる。3 節ではこの同化をトゥルク方言とパラン方言における同源語を比較することによって明らかにするが、その分析の準備段階として関連する音韻変化について 2 節で説明する。

その上で 4 節ではトゥルク方言において語末音節が母音 *u* で終り、その母音 *u* が歴史的に曖昧母音に遡る語（形式としてはトゥルク方言で CVC*u* だが歴史的には*CVCə に遡る語）に対し母音から始まる接尾辞-V などが付加し、CVC*u*-V となり [4]、歴史的曖昧母音としての *u* が次末音節に移動すると、3 節で述べるような語根内部における次末音節曖昧母音の後続母音への同化と同じ変化が起きることも議論する（4 節）。最後にアタヤル語にかろうじて見出した同源語との比較も試みる（5 節）。

2　音韻変化の補足

2.1　パラン方言における次末音節歴史的曖昧母音の e への変化

パラン方言における次末音節の曖昧母音の変化について述べる。Ochiai（2018a：24）によるとパラン方言では次末音節の曖昧母音は *e* に変化したが、トゥルク方言は曖昧母音を保存している。例えばトゥルク方言において「汁、スープ」を表す語は *bəgu* であるが [5]、パラン方言においては *begu* である [6]。

[4] 本稿では接辞として、接尾辞のほかに接中辞も登場する。接尾辞と接中辞が対になって接周辞を成すものもある。本稿に登場する接辞の多くは態と時制、または態と法を表すものであるが、本稿 4 節は形態音韻論に重きを置くものであるため、接辞の機能などについての詳述は省く。

[5] 本稿におけるトゥルク方言の形式はその他の文献が参照されていない限り Rakaw 他（2006）からの引用である。但し本稿では原典の表記に多少の修正を加えている。

[6] 本稿におけるパラン方言の形式は 2010 年代に行われた本稿筆者によるフィールド調査による。

2.2　パラン方言における次末音節二重母音 ay の e への変化

パラン方言の次末音節において曖昧母音が *e* に変化したことを述べたが、落合（2015）によると同方言において二重母音 *ay* も *e* に変化した。トゥルク方言は二重母音を保存する。落合（2015）では語末音節における重母音 *ay* の *e* への変化についてのみ言及しているが、落合（2020：57–59）によるとパラン方言おけるこの二重母音 *ay* の単母音化は次末音節と語末音節の両方で起きた。例えばトゥルク方言の *bəgay*「与える」という語があるが（Rakaw 他 2006：101）、セデック語パラン方言の同源語では *bege* である。トゥルク方言の *baytaq*「刺す」は（Rakaw 他 2006：99）[7]、パラン方言では *betaq* である。

2.3　共時的語末音節の u が曖昧母音に遡るかどうかの判定

語末音節の母音 *u* について説明する。語末音節の母音が *u* の場合は、*u* または *ə* に遡るため、セデック祖語を再建するのにおいてどちらの母音が適切かは接尾辞を付けた形式で判断される。Ochiai（2018a：26）によると接尾辞を付けることで、語末音節の母音が次末音節に移動するが、語末音節母音が曖昧母音に遡る場合、次末音節に移動するとトゥルク方言では曖昧母音で現れる（パラン方言では *e* で現れる）。

上述のように歴史的曖昧母音が次末音節で曖昧母音として現れるのはトゥルク方言の場合である。例えば表 2 に挙げたようにトゥルク方言において語根 *hətur*「阻止する」に接尾辞の付いた形式は *hətər-i*「阻止しろ」である（Rakaw 他 2006：312–313）。セデック祖語は *hətər となる [8]。

パラン方言の場合は次末音節に移動した歴史的曖昧母音はさらに *e* に変化するため、*hetun*（セデック祖語は*hətər の反映形）に対し、パラン方言において接尾辞の付いた形式は *huter-i* となる。パラン方言の形式における語根の語末子音は *n* であるが、これについても接尾辞が付加すると歴史的な分節音が現れるため *r* になっている。前次末音節が曖昧母音ではなくて *u* なのは、パラン方言において前次末音節より前の音節では母音が弱化するが、弱化母音が *u* として現れるためである。

語末音節の母音が歴史的に *u* に遡る場合は、接尾辞を付けた際にも *u* で現れる。例えばトゥルク方言の *səku*「蓄える」に接尾辞が付いた形式は *səku-an*「蓄える場所」である（Pecoraro 1977：259–260）。そのため語末音節は歴史的にも*u に遡ることがわかる。パラン方言においても同様で、同源語は *seku*、接尾辞の付いた形式の 1 つは *suku-i*「蓄えろ」となる。ここまでの説明を表 2 にまとめた。

[7] ただし、月田（2009：62–63）によるとセデック語トゥルク方言において次末音節の二重母音/ay/は音声的に前部母音の舌の位置が上昇して[ey]となる。

[8] Ochiai（2018b：134）では早期のセデック語パラン方言における語末 *r* が現代セデック語パラン方言では *n* に変わったと述べる。

表 2：語末音節の母音が*u または*ə に遡る場合における接尾辞の付いた形式の違い

パラン方言	トゥルク方言	セデック祖語
hetun *huter-i*	*hətur* *hətər-i*	*hətər「阻止する」
seku *suku-i*	*səku* *səku-an*	*səku「蓄える」

次節ではこれらの音韻変化を踏まえて、トゥルク方言の次末音節における曖昧母音の後続母音への同化について議論する。

3　次末音節*ə と母音始まりの語末音節から成る母音連続の場合

パラン方言の形式において、次末音節が *e* でありその直後に母音が続く場合がある。例えば表 3 の（vi）に挙げた *leiŋ*「隠れる」などであり、形式としては C*e*VC となる。ただし落合（2016a：20–21）に述べられるように *e*V の母音連続において、*e* に後続する母音が *a* の場合は渡り音として *y* が挿入され、音声的には *eya* [eja] になる[9]。形式としては C*eya*C となる。例えば表 3 の（v）に挙げた *seyaŋ*「怒る」などがある。この構造 C*e*VC を持ったパラン方言の語に対するトゥルク方言の同源語を特定した。表 3 の左列（パラン方言）と左から 2 番目の列（トゥルク方言）に示した 9 つのセットが得られた。右列に両方言の形式を基に再建したセデック祖語を示した。

語根の語末音節の母音に注目すると、全ての同源語セットにおいてパラン方言とトゥルク方言で一致が見られる。それらの語末音節母音は（i）から（v）までは *a* であり、（vi）は *i* であり、（vii）から（ix）は *u* である。但し（vii）はパラン方言の語根に 2 つの交替形 *leuŋ/looŋ* が見られそのうちの前者のみ語末音節母音が *u* である。（viii）はトゥルク方言のみ語末音節母音が *u* である。（vii）ではパラン方言において語末音節母音が *o* で現れるが、この音変化ついては後述する。（viii）ではパラン方言において語末音節母音が *i* で現れるが、この音変化ついても後述する。

語末音節の母音が *a* または *i* の場合はそれらの母音がセデック祖語へ遡るが、1 節で述べたように語末音節の母音が *u* の場合は、*u* または *ə* に遡るため、セデック祖語を再建する上でどちらの母音が適切かは接尾辞を付けた形式で判断される。このためトゥルク方言を基準にすると語根の語末音節の母音が *u* である（vii）から（ix）については、それぞれの語根

[9] ただし落合（2016a：20-21）の説明では *e* に後続する母音が *u* の場合も渡り音 *y* が挿入されると述べる。だとすれば表 3 の（vii）と（ix）における母音連続 *eu* の母音間でも半母音が挿入されるはずだが、実際にはこれらの語に半母音は挿入されない。今後、*e* に後続する母音が *u* の場合も渡り音 *y* が挿入されるかどうかについては精査が必要である。

の形式の横に接尾辞（命令を表す-*i* または非動作主態場所主語を表す-*an*）のついた形式を語根の横に挙げた[10]。

表 3：パラン方言で CeVC の構造を持つ語とトゥルク方言の同源語[11]

	パラン方言	トゥルク方言	セデック祖語	注釈
i	*ceyas /ceas/*	*saas*	*cəas	褐色の
ii	*ceyax /ceax/*	*saax*	*cəax	（薪を）割る
iii	*geyak /geak/*	*gaak*	*gəak	げっぷをする
iv	*heyan /hean/*	*haal*	*həal	担ぐ
v	*seyaŋ /seaŋ/*	*saaŋ*	*səaŋ	怒る
vi	*leiŋ*	*liiŋ*	*ləiŋ	隠れる
vii	*leuŋ/looŋ, looŋ-an*	*luuŋ, ləəŋ-an*	*ləuŋ	座る[12]
viii	*doi, dooy-un*	*duuy, diy-an*[13]	*dəuy	握る
ix	*reus, rees-i*	*ruus, rəəs-an*	*rəəs	埋める

表 3 のセデック語パラン方言の列において渡り音 *y* が挿入されている語（i）から（v）については、渡り音の *y* を除いた音韻表記を/ /内に記した。表 3 における語はセデック語パラン方言、トゥルク方言ともに語根が CVVC の音節構造を持つ。語中の母音連続について、パラン方言では上から 5 つの語は *ea* を持つのに対し、トゥルク方言では *aa* である。（vi）ではセデック語パラン方言が *ei* を持つのに対し、トゥルク方言では *ii* である。（vii）と（ix）ではセデック語パラン方が *eu* を持つのに対し、トゥルク方言は *uu* である。（viii）については後述する。これらの対応関係から、セデック語では母音連続の前半の母音が *e* であるのに対し、トゥルク方言では母音連続の前半の母音と後半の母音が同じ母音であることがわかる。

母音連続の前半の母音は次末音節にあたる。表 3 のパラン方言の語例において母音連続の前半の母音は *e* であるが、2.1 節と 2.2 節で述べたようにパラン方言の次末音節の *e* には二つ

10 命令を表す接尾辞-*i* は非動作主態をも表すものである。

11 セデック祖語を再建に関し、セデック語パラン方言とセデック語トゥルク方言で子音が異なる場合について以下で説明する。表 3 の（i）と（ii）に見られるように、セデック語パラン方言の *c* がセデック語トゥルク方言の *s* に対応する。この対応は Li（1981：260）においてすでに報告されており、アタヤル語群祖語として*c が再建されている。そのためセデック祖語でも*c で再建した。

4 つ目の語に見られるようにセデック語パラン方言の語末 *n* がセデック語トゥルク方言の語末 *l* に対応する。この対応について Ochiai（2016：319）は早期のセデック語パラン方言における語末 *l* が現代セデック語パラン方言では *n* に変わったと述べる。

12 正確に言えば、この形式には接頭辞 *tu-/tə-*（前者はパラン方言、後者はトゥルク方言）が付加することで「座る」を表す。パラン方言の形式は *tu-leuŋ* である。

13 接尾辞の付いた形式は月田（2009：62）から引用した。

の由来がある。1つは曖昧母音でもう1つは二重母音 *ay* である。母音連続の前半の母音が曖昧母音だったとすれば、早期パラン方言の形式は 1 つ目の語を例に挙げれば *cəas* になる。もし二重母音だったとすれば *cayas* になる。但し音素配列論から考えると、セデック語において次末音節の二重母音の直後に、語末音節の母音が直に続くという *cay.as* のような例は見られない（音節の区切りをピリオドで示す）。通常、上述の *baytaq*「刺す」のように次末音節二重母音 *ay* の後には、語末音節のオンセット *t* が続く。そのため、セデック語パラン方言の語例における次末音節の *e* は二重母音 *ay* に遡る可能性よりも、曖昧母音に遡る可能性のほうが高い。さらに、トゥルク方言で対応する形式は *saas* である。もし次末音節が二重母音 *ay* に遡るとしたら二重母音の要素の 1 つである *y* が含まれるはずだが、トゥルク方言の形式にはそのような要素が見られない。この点からも、表 3 における語例の次末音節の母音は曖昧母音に遡る可能性が高い。それゆえセデック祖語の次末音節には曖昧母音を再建した。

そうだとすれば、トゥルク方言において、次末音節の曖昧母音は別の母音に変化したことになる。トゥルク方言の（i）*saas* に見られるように母音連続の後半の母音が *a* の場合は、前半の母音が *a* で現れる。トゥルク方言の（vi）*liiŋ* に見られるように、後半の母音が *i* の場合は、前半の母音が *i* で現れる。トゥルク方言の（vii）*luuŋ* に見られるように、後半の母音が *u* の場合は、前半の母音が *u* で現れる。これらの語例からトゥルク方言では母音連続の前半の母音が後半の母音に同化したのではないかと考えられる。つまり、本来曖昧母音である前半の母音が後続する母音 *a*、*i*、*u* に同化し *əa* が *aa* に、*əi* が *ii* に、*əu* が *uu* になったと考えられる。例えば *saas* の場合、セデック祖語*cəas から曖昧母音の同化を経て *caas* になり、子音の変化を経て *saas* になったと考えられる。但し曖昧母音の同化と語頭子音の変化の順番は逆の可能性もある。

母音連続の後半の母音は語末音節に当たるが、この音節は 1 節と 2 節で述べたように歴史的曖昧母音が *u* に変化した位置である。母音連続の後半の母音が*Və のように歴史的曖昧母音の場合も見られるのだろうか。その可能性がある語例は表 3 における（vii）と（viii）である。（vii）におけるパラン方言 *leuŋ* とトゥルク方言 *luuŋ* から予想されるセデック祖語は *ləuŋ である。それぞれの方言形に接尾辞の付加した形式はパラン方言が *looŋ-an* である。期待される形式は *luuŋ-an* なのであるが（前次末音節の *u* はパラン方言において弱化母音を表す）、前次末と次末音節に移動した母音連続は期待される *uu* ではなく *oo* で現れる。ただこれには以下に述べるように（ix）に挙げた類例が見られるため、祖形の形式*ləuŋ は妥当だと考えられる。

（viii）について落合（2016b：302）がセデック語両方言の形式の比較によりセデック祖語*dəuy を再建している[14]。落合（2016b）では詳述されていないが、この語もトゥルク方言

[14] ただし、正確に言えば落合（2016a）は母音連続の間に声門閉鎖音を再建しているが本稿では、この声門閉鎖音の有無は取り上げず、セデック祖語に声門閉鎖音を挿入しないことにした。これについては 5 節でも述べているように今後の課題としたい。

では曖昧母音の同化を経て *duuy* に変わったことになる。パラン方言において接尾辞の付いた形式は *dooy-un* であり、期待される形式の *duuy-un* ではない。パラン方言において次末音節と語末音節の母音連続*əu が、接尾辞の付加により 1 つ前の音節に移った場合期待される *uu* ではなくて、*oo* になる傾向があるらしい[15]。これは母音連続の後半の母音の *u* がまず *o* に変わったと考えられる。なぜならセデック語パラン方言には前次末音節・次末音節に母音連続が起きる場合、2.3 節でも述べたように前次末音節に当たる前半の母音は弱化母音 *u* で現れることが期待されるのだが、期待に反して後半の母音と同じ母音が現れる。例えばパラン方言の *seediq*「人、他人」や *saadux*「硬い」がそうであり、期待される *suediq* や *suadux* ではなくて弱化母音に当たる前次末音節の母音は後半の母音の *e* または *a* に同化している[16]。そのためより古い時代のパラン方言（早期パラン方言と呼ぶことにする）において *ləuŋ-an* や *dəuy-un*（早期パラン方言における弱化母音は曖昧母音であったと想定している）だったものが *ləoŋ-an* や *dəoy-un* になり、さらに前次末・次末音節の母音連続における前半の母音の同化を受けて *looŋ-an* や *dooy-un* になったのだろう。

本稿の主眼はトゥルク方言の次末音節・語末音節における母音連続における前半の母音の母音の同化であるが、類似の音変化はパラン方言にも見られることになる。ただし、パラン方言の場合は前次末音節・次末音節の母音連続における前半の母音が同化するため、方言間で同化の起こる環境が異なっている。

さらに、次末音節と語末音節の母音連続*əu が接尾辞の付加による移動を受けなくても *oo* に変わったと考えられるのがパラン方言の語根 *doi* である。この語に関しては、パラン方言においてもトゥルク方言と同様に、次末音節・語末音節の母音連続において前半の母音の同化が起こったと考えられる。この形式は恐らく*dəuy またはその後のパラン方言の形式と推定される *deuy* から *dəoy* または*deoy* を経て母音連続の前半の母音が同化し *dooy* に変わり、さらに重音脱落により *doy* となったと言いたいところだが、最小の語単位である二音節語を作るために *y* を *i* に変えて *doi* となったと考えられる[17]。同様のことがパラン方言の *leuŋ*「座る」の交替形として見られる *looŋ* についても言える。この交替形の語根は *leuŋ* もしくはより古い形式の *ləuŋ* から *leoŋ* に一旦に変わり、さらに母音同化により *looŋ* になったのだろう。トゥルク方言において（vii）と（viii）の接尾辞の付いた形式はさらなる変化を経たが、これについては後述する。

パラン方言の（vii）*leuŋ* と（ix）*reus* を比べると母音連続は同じく *eu* を示しているが、接尾辞の付いた形式が異なる。（vii）*looŋ-an* と（ix）*rees-un* であり、接尾辞が付いて母音連続が 1 つ前の音節に移動すると前次末・次末音節の母音連続が *oo* と *ee* として現れる。（ix）

[15] 同様の変化が見られる語の例をさらに挙げる。トゥルク方言の *səura*「うらやむ」（原住民族語言研究發展基金會 2021）はパラン方言において期待される形式の *suura* ではなくて *soora* である。

[16] これら 2 つの語例は落合（2016a：30）から引用したが、そこでは母音調和と説明されている。本稿では、トゥルク方言の考察などを踏まえてこれも同化の一種であると考えを改めた。

[17] 類似した変化の流れは落合（2016b：303）でも述べられている。

rees-un においても、期待される形式 *rues-un* ではないのは、上述のように前次末・次末音節の母音連続において前半の母音が後半の母音に同化するためである。

パラン方言における前次末・次末音節の母音連続 *oo* については*eu に由来することを述べた。そうだとすれば（ix）の前次末・次末音節の母音連続 *ee* は別の母音連続に由来するはずである。パラン方言の語根において（ix）*reus* は次末音節が *e* であることから、母音連続の前半の母音は曖昧母音に由来する。後半の母音は*u ではないということであれば、残る母音は曖昧母音しかない。そのため次末音節・語末音節の母音連続は*əə であったと考えられ、セデック祖語に*rəəs を再建した。また、この語についてトゥルク方言の接尾辞の付いた形式は、期待される通りの *rəəs-an* という形式を示している。ここまで議論した上で分かるのは、トゥルク方言における次末音節曖昧母音の語末音節母音への同化は、語末音節の歴史的曖昧母音*ə が *u* に変わった後で起きたということである。だからこそ（ix）におけるトゥルク方言の語根は *ruus* である。つまり*rəəs から*rəus になった後にトゥルク方言では同化によって *ruus* に変わった。

残る問題はトゥルク方言の（vii）と（viii）における接尾辞の付いた形式は期待される形式である *ləuŋ-an* と *dəuy-an* を示さないことである。（vii）については次末音節に移動した *u* が曖昧母音として現れ *ləəŋ-an* となっている。これについて、Ochiai（2018a：35）は本来語末音節の母音に *u* を持つ場合、次末音節に移動しても *u* で現れるはずだが、トゥルク方言においてそれが次末音節に移動すると過剰な曖昧母音化を受けて *ə* で現れることがあると述べている。恐らくこの変化は、表 2 に挙げたように共時的には *u* に変わった語末音節の歴史的曖昧母音が、次末音節に移動すると本来の曖昧母音で現れることと関連がある。現代における語末音節の *u* が次末音節に移動した場合ある時は *u* で、ある時は *ə* で現れるが、どちらかに統一したいという動機が働き、*ə* で現れる場合は語末音節が歴史的に曖昧母音であったとの認識が薄れるにつれて語末音節の *u* を *ə* に変える傾向にあるのかもしれない。

（viii）についてもトゥルク方言の接尾辞の付いた形式において突発的に過剰な曖昧母音化が起きたのだろう。期待されるのは *dəuy-an* だが、過剰な曖昧母音化で *dəəy-an* になったと考えられる。さらに、落合（2016b：304）ではセデック祖語の語末*əy に由来する語はトゥルク方言において接尾辞が付き、前部要素の曖昧母音が次末音節に移動した場合に当該音連続は *iy* に変わると述べる。これは曖昧母音が次末音節に移動した場合に後部子音の *y* へ同化したと見なせる[18]。そのため *dəəy-an* はさらに *dəiy-an* になったと考えられ、次に前次末音節の曖昧母音が後部母音 *i* の同化を受けて *i* になったのだろう。そして *diiy-an* となったあとで、重音脱落が起きて *diy-an* になったのだろう[19]。

[18] 月田（2009：115）のトゥルク方言の記述に類似の同化が見られる。前次末音節かそれ以前の音節にある曖昧母音の前後に *y* がある場合、曖昧母音が *i* へ変化するということであり、変化の起こる環境が異なる。

[19] または *dəəy-an* の段階で重音脱落が起きて *dəy-an* となり、曖昧母音の *y* の直前での *i* への同化が起きて *diy-an* が生じた可能性もある。

ここまで表 3 の語例について*CeVC という型のセデック祖語を再建した。トゥルク方言では次末音節と語末音節の母音連続において次末音節の曖昧母音が後続する語末音節の母音に同化することが分かった。次節では母音終わりの語末音節が歴史的曖昧母音に由来し、その直後に母音始まりの接尾辞が付く場合について、同様の同化が起きることを見る。

4　語末音節*ə に母音始まりの接尾辞が付いて母音連続が生じる場合

本研究は、トゥルク方言の語末音節における歴史的曖昧母音*ə に母音始まりの接尾辞が付いて母音連続* ə-V が生じる場合、歴史的曖昧母音が後続母音に同化するのではないかと観察したことに端を発する。この観察のきっかけを与えたのがトゥルク方言の語彙集である Pecoraro（1977：52–53）において、彼がある語の接尾辞の付いた形式について括弧書きで附け加えた所感である。トゥルク方言に *dəŋu*「乾く・乾かす」という語がある [20]。これに接尾辞を付けた形式として Pecoraro（1977：53）は *kədəŋaan*「乾き」を挙げ、以下のように述べる “Pourquoi n’est ce pas la forme: Kdngoan?” 接尾辞-*an* の付いた形式として期待されるのは *kə-dəŋu-an* であるのに、何故その形式ではなく *dəŋu* の語根末母音が *u* から *a* に変わった *kə-dəŋa-an* という形式で現れるのかと疑問に思っているのである。

一方でパラン方言の同源語について見ると、語根は *deŋu* である。接尾辞の付いた形式として *d<un>ŋey-an*「燻されて乾かされたもの（通常は獣の肉の意）」がある [21]。ただしここでは過去を表す接中辞<*un*>と非動作主態場所主語を表す-*an* の 2 つの接辞が付いている。注目されるのは語根末の *u* が、接尾辞の付いた形式では *e* に変わる点である。この *e* の直後に見られる *y* は語根には見られないものだが、これは *e* と *a* の母音連続間に生じる渡り音としての *y* と考えられる。そのため渡り音を省いた音韻表記 *dunŋean* に、さらに形態分析を加えた表記は *d<un>ŋe-an* となる。Ochiai（2018a：26）によると語末音節の母音が歴史的曖昧母音である場合、パラン方言ではこの母音が次末音節に移動すると *e* で現れる。そのため *deŋu* における語末音節の母音 *u* は*ə に遡る。セデック祖語は*dəŋə と再建される。ここまでの議論は表 4 の（b）に示している。

トゥルク方言の *dəŋu* では接尾辞を付け歴史的曖昧母音に遡る語末母音 *u* が次末音節に移動した場合に歴史的曖昧母音が後続母音に同化した。この変化は、表 3 で見たようにトゥルク方言の語根内において、歴史的曖昧母音に遡る次末音節の母音と後続の母音から成る母音連続が生じる場合、前半の歴史的曖昧母音が後半の母音に同化するのと同様の環境で起きる変化である。トゥルク方言の *dəŋu* を含め、接尾辞を付けた場合に同様の同化が見られる語をいくつか特定した。それらを表 4 に示す。右列はトゥルク方言の形式で、各項目につ

[20] Pecoraro（1977：52）における正確な表記は *dngo* であるが、本稿では子音連続間に曖昧母音を加える、*o* を *u* に変える（音声的に母音 *o* に近い音として認識されたのだろうが、トゥルク方言において母音 *o* は音素として建てられないため）、*ng* を *ŋ* に変えるなどして表記に修正を加えた。

[21] 本来なら *d<un>uŋey-an* というように前次末音節に弱化母音の *u* が現れるはずだが、落合（2016a：124–125）に述べられるように接周辞<*un*>…-*an* の付加により前次末音節のオンセットが鼻音から始まる場合は、この鼻音の直後の母音が脱落する。

き語根または語基を上に接尾辞の付いた形式を下に挙げた。（g）では接尾辞の付いた形式を 2 つ見つけることができた。中央の列はパラン方言で、各項目の上には左列のトゥルク方言の語根または語幹に相当する語の同源語を示した。（g）にはパラン方言の同源語が得られなかった。各項目の下にはパラン方言における接尾辞の付いた形式を示した。パラン方言の（a）には接尾辞の付いた形式は得られなかった。トゥルク方言とパラン方言におけるこれら形式の比較をもとにセデック祖語における語根・語基も再建した。

表 4：トゥルク方言において接尾辞を付けた場合に歴史的曖昧母音の同化が見られる例

	トゥルク方言	パラン方言	セデック祖語
a	*bəsu*「けちな」 *kə-bəs**a-a**n*「けちの極み」	*besu*「好色な」 ---	*bəsə
b	*dəŋu*「乾く・乾かす」 *kə-dəŋ**a-a**n*「乾き」	*dəŋu*「乾く・乾かす」 *d<un>ŋey-an*「燻されて乾かされたもの」	*dəŋə
c	*kətu*「噛む」 *s<əŋ>e-kət**a-a**n*「石に圧し潰される」[22]	*tetu*「噛み切る」 *tute-i*「噛み切れ」	*kətə/*tətə
d	*paru*「大きい」 *k<əm>ə-pər**a-a**n*「大きさ」[23]	*paru*「大きい」 *k<un>-puruw-an*「大きさ」	*parə/*paru
e	*səgəəgu*「過度な」 *səgəg**i-i***「過度に行え」	*egu*「多い」 *k-uge-i*「多くしろ」	*(səgə-)əgə
f	*səmalu*「作る、修理する」 *səl**a-a**n*「作る、修理する」	*sumalu*「作る、修理する」 *sulume-i*「作れ、修理しろ」	*sə-malə
g	*təbənu*「土を盛る」 *təbən**u-u**n*「土を盛る」 *təbən**i-i***「土を盛れ」	---	*təbənə

（b）に再建した祖形*dəŋə は上述したようにパラン方言との比較を基にセデック祖語を再建した。（c）も（b）と同様のパターンを示すが、トゥルク方言の語根 *kətu* では語頭子音が *k* であり、パラン方言の語根 *tetu* では語頭子音が *t* である点が異なる。セデック祖語の語頭子音にどちらを再建すればいいのか判断できないのでどちらも記した。この他（f）も同様のパターンが見られる。パラン方言に *su-malu*「作る、修理する」という語基があり、こ

[22] トゥルク方言の場合、過去を表す接中辞<*un*>が<*əŋ*>となってるが、鼻音 *n* がこれに後続する唇音 *k* の調音位置に同化し *ŋ* になったためと考えられる。

[23] トゥルク方言の場合、過去を表す接中辞<*un*>が<*əm*>となってるが、鼻音 *n* がこれに後続する唇音 *p* の調音位置に同化し *m* になったためと考えられる。

れは語根 *malu*「よい」から派生されている。この語基に接尾辞を付けた形式は *sulume-i*「作れ、修理しろ」である。これは、期待される形式は *sumule-i* なのだが、そこから *l* と *m* との音位転換が起こったと考えられる[24]。いずれにせよ次末音節に移動した語末音節の母音 *u* が *e* で現れることから、これは歴史的曖昧母音に遡ることが分かる。

（e）も同様のパターンを示す。パラン方言には *egu*「多い」（早期は *əgu*）という同源語があり、トゥルク方言の形式ではこの語根に対し接頭辞 *səgə-*が付いている[25]。パラン方言で接尾辞の付いた形式は *kuge-i*「多くしろ」なので、語根末の *u* が次末音節に移動すると *e* で現れる。このことから歴史的曖昧母音に遡ると分かる。

（d）についてパラン方言の同源語はトゥルク方言と同形の *paru* であるが、接尾辞の付いた形式は *k<un>-puruw-an*「大きさ」という（接頭辞 *k-*と接中辞*<un>*の複合体 *k<un>-*も付いている）。本来の語末母音 *u* は接尾辞の付加で次末音節に移動しても *u* で現れている。ちなみに次末音節の *u* の直後の *w* は *ua* という母音連続の間に挿入される渡り音である。渡り音の *w* を省いた音韻表記は *k<un>-puru-an* となる。パラン方言を基準に考えれば、語末母音の *u* が次末音節に移動しても *u* のままなので、*u に遡ると考えられる。その場合のセデック祖語の形式は*paru となる。しかし、トゥルク方言を基準に考えれば語末母音は歴史的曖昧母音であると考えられるのでセデック祖語に再建される形式は*parə となる。これについては、パラン方言の方が不規則であり、歴史的曖昧母音が次末音節に移動しても期待される *e* ではなく *u* に変化させた可能性がある。一方で、表 3 の（vii）と（viii）についても述べたようにトゥルク方言の方が不規則であり、本来の語末母音 *u* が次末音節に移動した際、突発的に過剰な曖昧母音化を受け、この次末音節の曖昧母音が後続母音に同化した可能性もある。セデック祖語の形式は今のところどちらかに決められないので 2 つの候補を挙げた。

（a）については、パラン方言に同源語である *besu* があるが（ただし両方言において意味が異なる）、これに接尾辞を付けた形式は得られなかった。トゥルク方言において歴史的曖昧母音の同化が起きているので、セデック祖語の形式として*bəsə を再建した[26]。（g）については、パラン方言において同源語が得られなかったが、トゥルク方言において歴史的曖昧母音の同化が起きているので、セデック祖語の形式として* təbənə を再建した[27]。

[24] 但し、筆者の知る限り *l* と *m* の音位転換が起こる例はこれのみである。

[25] 月田（2009：261–262）によると *sə-*は動詞を作る接頭辞である。恐らく *səgə-*の前半はこの *sə-*だろう。後半は子音 *g* が含まれるが、これは語根 *əgu* 中の子音を重複したものだろう。

[26] 但しトゥルク方言 *paru*「大きい」について述べたように、語末母音は曖昧母音ではなく *u* であったが、次末音節に移ったことでトゥルク方言に起こりがちな突発的な曖昧母音化を受けた可能性もある。

[27] 但し注 22 でも述べたように、語末母音は曖昧母音ではなく *u* であったが、次末音節に移ったことでトゥルク方言に起こりがちな突発的な曖昧母音化を受けた可能性もある。またセデック祖語 *təbənə* は 3 音節あるが、典型的な語根は 2 音節である。そのためこの語には接頭辞 *tə-*が付いている可能性が高い（脚注 9 参照）。だとすれば語根は *bənə* である。

5　アタヤル語との対照

セデック祖語の*CəVC 型の語とアタヤル語の同源語との比較してみる。アタヤル語にはスコレック方言とツオレ方言の 2 方言がある。語根内に母音連続が生じる表 3 のセデック語の語例において、アタヤル語の同源語を特定できたのは 1 例であった。表 3 の（v）におけるセデック祖語*səaŋ「怒る」に対するアタヤル語スコレック方言の同源語は *sʔaŋ* である [28]。スコレック方言の形式ではセデック祖語に見られる次末音節の曖昧母音が見られず、その代わりに声門閉鎖音が表れている。アタヤル語ツオレ方言では、この方言に属する Mayrinax 集落と Palungawan 集落の形式が *masʔaŋ* と報告されている [29]。語頭の *ma-*は静態動詞を表す接頭辞であるため、語根は *sʔaŋ* でスコレック方言と同形式である。

これに対しアタヤル語ツオレ方言に属する Mekarang 集落では *məsaʔaŋ* という形式が挙げられており、語根は *saʔaŋ* である。この語根はスコレック方言やツオレ方言の Mayrinax 集落と Palungawan 集落の語根 *sʔaŋ* と同様に声門閉鎖音が見られるが、声門閉鎖音の直前に次末音節の母音が見られる点で異なる。この次末音節の母音は曖昧母音ではなく *a* で現れている。このことからツオレ方言 Mekarang 集落の形式 *saʔaŋ* ではトゥルク方言の形式 *saaŋ* と同様に、次末音節の曖昧母音が後続する母音への同化を受けたと考えられる。但し Mekarang 集落の形式では同化が声門閉鎖音を介して行われている。この声門閉鎖音に関して、音素的に本来存在するものなのか、それとも音声的（恐らくは母音連続を回避するために）に挿入されたものなのかは以下にも述べるように今後の研究の余地がある。

ツオレ方言に属する Mekarang 集落の形式と同様の同化が見られるのが、同じくツオレ方言に属する Skikun 集落の形式 *səmaʔaŋ* である。これは静態動詞を表す接頭辞 *mə-*を使わずに動作主態を表す接中辞<*əm*>を挿入していると解釈でき、*s*<*əm*>*aʔaŋ* と分析される。語根は *saʔaŋ* であり、Mekarang 集落の形式と同形式である [30]。

アタヤル語において、セデック語トゥルク方言に見られたような次末音節曖昧母音の後続母音への同化が見られる形式は、ツオレ方言の一部の集落に確認された。ここまで述べたアタヤル語の 2 方言の「怒る」を表す形式とセデック語における同源形式を表 5 にまとめた。

Li（1981：277）ではアタヤル語とセデック語の諸方言の形式からアタヤル語群祖語を *masəʔaŋ と推定している。語頭の*ma-は接頭辞であるため、語根は*səʔaŋ と言うことになる。しかしながら、アタヤル語群祖語の形式として声門閉鎖音が間に入らない*səaŋ の他に、曖昧母音が間に入らない*sʔaŋ も排除されないだろう。アタヤル語群祖語に*səʔaŋ（*CəʔVC

[28] このアタヤル語スコレック方言の形式は小川（1931：23）から引用した。但し正確には *məsʔaŋ* と表記されている。語頭の *mə-*は接頭辞であると考えられるため、本稿ではそれを省いた語根の形式を挙げた。

[29] アタヤル語ツオレ方言の形式は原住民族委員會（2013）から引用した。

[30] または本来 *məsaʔaŋ* という形式を持っていたが（Mekarang 集落と同形式）、*m* と *s* が突発的に音位転換を起こして生じたとも考えられる。

型）を建てるべきか、*səaŋ（*CəVC 型）を建てるべきか、*sʔaŋ（*CʔVC 型）を建てるべきかについては今後の課題としたい。

表 5：セデック語とアタヤル語の「怒る」

セデック語パラン方言	*seyaŋ*
セデック語トゥルク方言	*saaŋ*
セデック祖語	*səaŋ
アタヤル語スコレック方言	*sʔaŋ*
アタヤル語ツオレ方言 Mayrinax 集落、Palungawan 集落	*sʔaŋ*
アタヤル語ツオレ方言 Mekarang 集落、Skikun 集落	*saʔaŋ*
アタヤル祖語	*sʔaŋ, *səʔaŋ
アタヤル語群祖語	*səaŋ, *sʔaŋ, *səʔaŋ

次に、Huang（2009：272）ではアタヤル語において歴史的曖昧母音に遡る語末母音の *u* が接尾辞の付加により次末音節に移動した場合、曖昧母音に変化することが述べられている。つまりセデック語と同じ変化が起きる。アタヤル語において語末が母音 *u* で終わり、さらにこの母音 *u* が曖昧母音に遡る語の場合、接尾辞がついたらどのような変化が起きるのか確かめるため、表 4 に挙げたセデック語との同源語を探したところ（c）の同源語としてアタヤル語スコレック方言に *kətu*「噛む」が見られ、これに接尾辞の付いた形式として *kətə-un*「噛む」や *kətə-ay*「噛もう」が見られた[31]。これら接尾辞の付いた形式では、歴史的曖昧母音に遡る語末母音の *u* が接尾辞の付加により次末音節に移動すると曖昧母音になることがわかる。アタヤル語では期待されるとおりの変化が起こっており、セデック語トゥルク方言に起きるような次末音節に移動した歴史的曖昧母音の後続母音への同化は起こっていない。

6　おわりに

3 節ではセデック祖語において次末音節と語末音節に跨る母音連続を持ち、前半の母音が曖昧母音である型*CəVC を持つ語は、トゥルク方言において次末音節の曖昧母音が後続する母音に同化することを述べた。4 節では同様の変化がトゥルク方言において、歴史的曖昧

[31] 但しこれらの形式はアタヤル語スコレック方言のものである。アタヤル語ツオレ方言についても同様のことが言えるかどうかは今後の課題としたい。これらの形式は原住民族語言研究發展基金會（2021）から引用した。また小川（1931：107）によるアタヤル語の語彙集には語頭子音が *t* の形式 *tetu* が挙げられているが（セデック語の同源語については表 4 の（c）を参照）、この形式の意味は「木を切る」となっている。

母音に遡る語末母音 *u* に母音から始まる接尾辞が付き、歴史的曖昧母音が次末音節に移動する場合にも起こることを述べた。僅かに見られたアタヤル語の同源語ではセデック祖語の *CəVC 型（例：*səaŋ「怒る」）は曖昧母音が声門閉鎖音に取り換えられた CʔVC（例：*sʔaŋ*）という形式がスコレック方言と一部のツオレ方言集落に見られた。また、声門閉鎖音の直前に母音現れるが、後続母音に同化した $CV_1ʔV_1C$（例：*saʔaŋ*）という形式が一部のツオレ方言集落に見られた。後者はセデック語トゥルク方言と同様に次末音節において曖昧母音が後続母音に同化したものと考えられる。

また、アタヤル語（スコレック方言）において歴史的曖昧母音に遡る語末母音の *u* に接尾辞が付いて次末音節に移動した場合、セデック語トゥルク方言に見られるような曖昧母音の後続母音への同化は起こらず、歴史的曖昧母音は曖昧母音として現れる。

参考文献

原住民族委員會（2013）『原住民族語Ｅ楽園』http://web.klokah.tw/ /［2022 年 2 月アクセス］.

原住民族語言研究發展基金會（2021）『原住民族語言線上詞典』https://e-dictionary.ilrdf.org.tw/［2022 年 3 月アクセス］

Huang, Hui-chuan J.（2018）The nature of pretonic weak vowels in Squliq Atayal. *Oceanic Linguistics* 57.2：265–288.

Li, Paul Jen-kuei（1981）Reconstruction of Proto-Atayalic phonology. *Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica* 52.2：235–301.

小川尚義（1931）『アタヤル語集』台湾総督府.

小川尚義・浅井恵倫（1935）『原語による台湾高砂族伝説集』台北帝国大学言語学研究室.

落合いずみ（2015）「セデック語パラン方言の二重母音について」『日本言語学会第 150 回大会予稿集』392–397. 日本言語学会.

落合いずみ（2016a）「セデック語パラン方言の文法記述と非意志性接頭辞の比較言語学的研究」京都大学博士論文.

落合いずみ（2016b）「セデック語パラン方言における語末 uy の交替」『日本言語学会第 152 回大会予稿集』300–305. 日本言語学会.

Ochiai, Izumi（2016）Bu-hwan vocabulary recorded in 1874：Comparison with Seediq dialects. *Asian and African Languages and Linguistics* 10：287–324.

Ochiai, Izumi（2018a）Historical reduplication in Seediq. *Kyoto University Linguistic Research* 37：23–40.

Ochiai, Izumi（2018b）Ryuzo Torii’s Paran Seediq glossary (1900): Annotation and observation. *UST Working Papers in Linguistics* 10：113–143.

落合いずみ（2020）『十九世紀末のセデック語資料「埔里社撫墾署管轄北蕃語集」―百余年後の言語学的考察―』北海道大学アイヌ・先住民研究センター.

Pecoraro, Ferdinando（1977）*Essai de Dictionnaire Taroko-Français*. Paris: Société pour l'Etude et la Connaissance du Monde Insulindien.

Rakaw, Lowsi, Jiru Haruq, Yudaw Dangaw, Yuki Lowsing, Tudaw Pisaw, and Iyuq Ciyang 編（2006）『太魯閣族語簡易字典』秀林郷公所.

月田尚美（2009）「セデック語（台湾）の文法」東京大学博士論文.

Wolff, John U.（2010）*Proto-Austronesian Phonology with Glossary, vol. 1*. Southeast Asia Program Publications, Cornell University.

受理日 2022 年 4 月 12 日